

薩摩義士の事蹟

根 橋 直 人

Historical Facts of the River Improvements by the *Satsuma-Gishi* (the Loyal Retainers of the Satsuma Clan)

Naoto NEHASHI

As this year is the 100th anniversary of the “Meiji Kaishū” which is the river improvements of Kiso Rivers in the Meiji Era, I introduce the outline of the “Satsuma Kōji” which is said to be the origin of the Meiji Kaishū.

1. はじめに

今年（昭和62年，1987）は，木曾三川の明治改修が開始（明治20年，1887）されてから丁度100周年に当るため，地元を中心として多彩な行事が繰り展げられたことは新聞等により周知の事である。この改修は蘭人工師ヨハネス・デ・レイケの指導により近代的工法が駆使されたが，今から234年前の宝暦3年（1753）に所謂「薩摩義士」による工事（「宝暦治水」と称される）が下命されたのがその創始と言える。今回の催し中に，同義士を讃えるものが多々あるが，「赤穂義士」と並称される割に，その史実が周知されていない憾みがあるので，この好機にPRを兼ね事蹟の概要を述べてみる。

2. 普請（工事）に関する予備知識

2.1 三川の現況（表1）

2.2 地 形

濃尾平野は東から西に低く傾斜し，ために東の木

曾川から長良川，揖斐川へと河床が低くなり（約8尺差，2.4m），水流はすべて南西に向って集中する傾向がある。

従ってその上流で長良川を合流する木曾川と揖斐川の合流点では，木曾川がその落差を猛然と流下して注ぎ込み，特に洪水時は激流奔騰し，飛沫天に冲する勢で，揖斐川は逆に押返され，屢々その沿岸地は大被害を蒙った。又気候上，降雨後洪水が到達する時刻が西から東へ遅れるため，揖斐川の水位がピークを越した頃，長良川，木曾川の洪水流が押寄せ，揖斐川は水位が下る処か，逆に押返され，沿岸の輪中堤が破られ惨害を及ぼした。

2.3 輪 中

当地域は，三川の本，支流等が錯雑して村落を周流するため，村落同志がブロックを作って周りに堤防を築く所謂「共同水防施設」なるものが古来から在り，それを称する。当地方独得の堤防形態である。江戸時代には80余，現在でも統合され，その名残り

表1 木曾三川諸元

	水 源	延長 (km)	流域面積 (km ²)	最大流量 (m ³ /s)
木曾川	長野県西筑摩郡 鉢盛山 (2,446m)	227	5,275	11,145 (犬山)
長良川	岐阜県郡上郡 大日岳 (1,709m)	166	1,985	6,713 (忠節)
揖斐川	岐阜県揖斐郡 冠 山 (1,257m)	121	1,840	4,490 (万石)

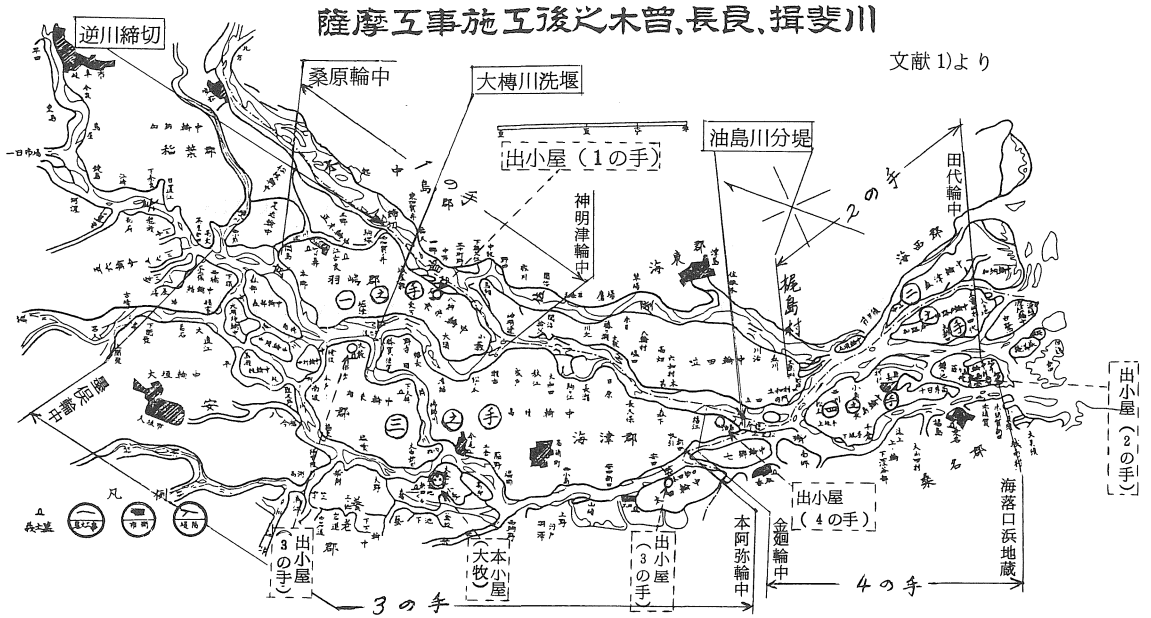


図 1 薩摩工事施工後之木曾、長良、揖斐川

が3, 40ある。

2.4 徳川幕府の治水制度

1. 公儀普請…幕府の費用によるもの。
2. 国役普請…地方民に国役金を課するもの。(例が最も多い)
3. 御手伝普請…諸大名に助成させるもの。
4. 自普請…領主, 住民の自費によるもの。

2.5 工事区域 (図1)

川口から上流へ延長15里(1里≒4km, 従って60km), 幅1~4里(4~16km), 濃・勢・尾三州の村々193ヶ村に及ぶ広大なもの。

堤防延長は60,400間(1間=6尺≒1.8m, 従って約28里=110km)に及ぶ。

2.6 工種と細分

工種	{	第1期…	{ 定式普請 (毎年恒例の春役普請)
			{ 急破普請 (緊急の災害復旧工事)
		第2期…	水行普請 (川の疏通をよくする)
			(純然たる治水工事)

細分

1. 定式, 急破普請…堤上置・腹付, 砂浚, 堤切所築立等
1. 水行普請…川分堤, 洗堰, 締切堤 (以上難工事), 洲浚, 切広, 猿尾, 堤上置・腹付等
1. 埴樋普請…樋管改築
1. 田畑切上堀…悪水堀, 農道用仮橋

2.7

1. 担当の主役 (表2)
2. 工区別諸役 (表3)

3. 薩摩工事の経緯

〔慶長14年 (1609) : 徳川家康, 御囲堤を築く〕

家康は, 西方大坂城 (豊臣秀頼) 方の備えとして, 関東流治水の開祖伊奈備前守の発意, 指導により木曾川左岸, 犬山~弥富間に7里 (28km) の大堤防を築かせた。正に金城鉄壁のもので, 治水上よりむしろ軍事上の目的であった。以後, 美濃側は洪水の脅威に頻繁に晒されることになった。

〔享保20年 (1735) : 三川分流計画の立案〕

紀州流開祖井沢弥惣兵衛は, 美濃郡代として赴任の際, 親しく現地を巡視し, 綿密な分流計画を樹てた。之は現代技術家が見ても驚く程緻密なものであったらしい。之が今回の工事の基礎となったと言う。

〔延享4年 (1747) : 奥州二本松藩の手伝普請〕

三川分流の手伝普請の嚆矢であるが, 最初のこととして規模が小さく, 思わしい効果は挙げなかった。

〔宝暦3年 (1753) 8月 (9月) () 内は新暦を表わす。以下同じ : 未曾有の洪水起る〕

木曾川で1丈7尺 (1丈=10尺, 1尺=0.3m, 従って5.1m) の増水あり, 沿岸に甚大な被害を与え,

表2 手伝普請 主役

藩名	石高(石)	藩主名	総奉行	担当老中	掛勘定奉行
薩摩鹿兒島	770,800	松平(島津)薩摩守重年	平田靱負	堀田相模守	一色周防守

表3 手伝普請工区別諸役

	幕府役人		笠松郡代	御手伝方
総見廻り	美濃郡代 代官 御勘定組頭	青木次郎九郎 吉田久左衛門 室田金左衛門	元締手代	総奉行 平田靱負 副奉行 伊集院十蔵
1の手(桑原輪中より神明津輪中まで)	目付役 水行奉行	石野三次郎 高木新兵衛	堤方役人	御手伝方 (総勢350名)
2の手(梶島村より田代輪中まで)	目付役 美濃郡代	大久保荒之助 青木次郎九郎	〃	〃 (〃 300余名)
3の手(墨俣輪中より本阿弥輪中まで)	目付役 水行奉行	浅野左膳 青木内膳	〃	〃 (〃 500余名)
4の手(金廻輪中より海落口浜地藏まで)	目付役 水行奉行	新見又四郎 高木玄蕃	〃	〃 (〃 600余名)

住民から本格的工事を要請する嘆願書相次ぎ、幕府も遂に黙過し得ず本腰を入れることになった。

【3年8月(9月)：幕府、手伝普請の内申書作成】
内容

①工事	水行 工事	木曾川を佐屋川へ分流させる。 木曾川と揖斐川の分流	80,000両	} 93,000両
②大名手伝普請にて行なう				
③工期	宝暦4年2月～3月 (2月～5月) (第1期)			
	宝暦4年9月～12月 (11月～5年2月) (第2期)			
④工費分担	93,000両			
		16,000両 (20%)	-----幕府方	
		77,000両 (80%)	-----手伝方	

尚村請負(村方人足採用)で施工し、町請負(町人業者に委託)にはしない。

3.1 薩摩工事の幕明け

【3年12月25日(4年1月18日)：9代将軍家重より24代薩摩藩主島津重年へ手伝普請の下命】

「濃州、勢州、尾州川々御普請御手伝 被仰付候間、可被存其趣候。尤此節不及参府候。恐々謹云

12月25日

松平薩摩守殿

西尾隠岐守始5老中名」

突然、美濃から300余里隔った無縁の薩摩藩に、空前の大工事を命じたのは、故意か必然か、憶うに幕府は従来、雄藩薩摩に対して懐柔策を執って来たが、中興の祖8代吉宗将軍に到り、基盤固まり、威光揺るぎないものとなったので、9代に到って俄然外様弾圧の拳に出たものであろう。

命を受けた国元鹿兒島では驚愕、悲憤、受諾か否かに別れて激論されたが、股肱の老臣平田靱負が「国土経営、生民救済の業に身を投じ、耐え難きに耐え

て工事遂行に邁進することこそ武士道の本懐であり、延いてはお家安泰につながるもの。」と説いたので、藩論一致して受諾を決意したと言われる。

〔4年(1754)1月(2月)：手伝方、総奉行以下任命〕

〔4年1月21日(2月12日)：藩主より受諾の請書呈出〕

〔4年2月(3月)：工費調達苦心〕

薩藩の財政状況は、旧来の物入り嵩み、既に66万両の借財を抱え込み苦慮中の所へ、今回の下命、大藩とは言え正に運命を決する程の大難事となった。総奉行平田は急使を上方方面に遣し、銀主に頼み込み、必要とあらば何度でも進物、饗応を繰返せと指図(苦境の程が思いやられる)、自らも赴任途次、京、大阪に滞在して調達に奔走し、やっと7万両入手し得た。

今回竣功までの借銀全額は22万両、従来の66万両と併せて90万両の多きに達し、藩の財政は根本的な破滅に陥った。

又工事の総額は、借銀22万両と国元からの資金(藩債、加勢銀、徴税、生産物代金、検約代)15万両を併せて40万両近くらしい。予想を上回る巨額のため藩全体が一丸となって血の出る様な苦心の結果遂に達成した。雄藩にして始めて為し得たことである。

40万両を今日の価額に換算すれば288億に当る由。
即ち1両=米4俵(240kg)だから現価で72,000円、故に、40万両=72,000円×400,000=288億円^{註)}。
又一説には、現価の1/16,000から推算して、40万両=4,800億とも言われる^{文献2)}。

〔4年2月～閏2月(2月～4月)：藩士任地到着〕

鹿児島から総・副奉行以下数百名、江戸薩摩邸から数百名派遣され、美濃国大牧に本小屋(役館)、各工区に5出張小屋を設けた。

出役人数は家老以下士分567人、下人等980人、現地採用人足は多い時は、1,000人に達し、総勢2,000余人が従事した。

〔4年1月(2月)：幕府方諸役人到着〕

〔4年2月27日(3月20日)：第1期工事一斉に着手〕

春期出水に備え早目に着手。関係村々57ヶ村、工期は5月25日(6月15日)まで。(この年は閏2月があるため全期4ヶ月、120日)

人夫賃が老、若一律に定められた事は、女、子供まで一人前の賃銀を払わねばならず、手伝方には余分な支出となる。

村方の藩士待遇：

- ① 一汁一菜に限り、酒肴のもてなし一切無用。
- ② 売買の値段は所の相場通りにして安くする事無用。

③ 宿舎は現状のまま、増築、修繕等するな。同情に値するのは藩士方の身の上である。疲れて帰っても食事、宿舎は粗末そのもの、雨につけ風につけ藩士達を切齒せしめ、床に就けば工事の前途、故郷の身内の気懸り等切りがなく、さて明日の仕事をと思い直して煎餅蒲団引被る。茫々幾百里の旅空に、佗びしい1年余の月日を送った彼等の苦衷を思えば、瞑目、転た同情の念を禁じ得ないものがある。

〔4年閏2月2日(3月25日)：藩主夫人江戸にて逝去〕

着工早々の折の俄かの不幸(23才)

服喪中の工事出役を遠慮すべきか伺いを立てた所そのまま続行を命じたのは冷遇の感を免れない。

〔4年4月(5月)：第1期工事最初の犠牲者3名出る〕

仕事の手違い、幕吏の難題な叱責等に堪えかね自刃する者、「4の手」所属藩士永吉惣兵衛等。この中1名(内藤十左衛門)は高木水行奉行の家来で、監督不行届の為と判ったが、監督側にも責任を重んずる武士が居た。

〔4年5月2日(6月22日)：第1期工事竣功〕(表4)

〔4年5月～9月(6月～11月)：夏期工事中止〕

雪融水のため。手伝方全員次期工事の準備に精励。

〔4年6月～7月(7月～8月)：洪水頻りに起る〕

竣功場所にも被害を受け、手伝方余分の出費を余儀なくされる。

〔4年3月5日(4月26日)：水行普請の計画変更〕

3年8月洪水のため変更を生じ、幕吏、手伝方縁寄合して決める。

七郷輪中(5の手)の新川堀割取止め、代りに油島と逆川が加わる。七郷輪中分52,000両を削除、結

注) 1987年10月2日付中日新聞朝刊9頁「木曾三川シンポジウム」
記事(作家、大内美予子氏談)

表4 第1期工事竣功量

工 区	普請別	工 種	数 量 (総延長)
1 の 手	定式	堤上置1,258間 (2,300m) 始め 腹付等	1,421間 (2,600m)
2 の 手	定式・急破	〃 1,844間 (3,300m) 〃 〃	3,280間 (5,900m)
3 の 手	定式・急破	〃 22,978間 (41,400m) 始め 腹付, 切所等	37,567間 (67,600m)
4 の 手	急破	〃 4,608間 (8,300m) 〃 〃 〃	6,317間 (11,400m)

局元設計81,000両が37,000両となり、44,000両の減額となる。併し後日油島分増額により6,300両増加となった。

【4年5月26日(7月18日):村請か外請かの選定】

外請は町方専門家による施工だから、确实、早期、廉価であり、手伝方はこの方を望んだが、地元村々の抵抗もあり、江戸へ裁定を願った所、難場38ヶ所中6ヶ所許可になった。

【4年6月17日(8月7日):2大工事の計画暫定案】

油島締切……油島方550間(990m)、松の木村方200間(360m)の締切堤、中間は300間(540m)明ける。併し今後の水行次第で全締切になるやも知れない。

大樽川締切……洗堰(表面を石で覆った越流堤)とする。併しこれも完全締切にするかどうかは油島の出来に関わる水行次第。

【4年7月5日(8月22日):薩摩守現地視察】

参勤途次、美濃へ廻り、現地(1の手、3の手)を視察し、総奉行以下の労苦をねぎらい、殊に犠牲者の出た事に心を痛めた。

【4年7月22日(9月8日):平田奉行より国元家老宛書翰送る】

要旨

- ① 元設計ではすべて村請負になっているが、難場38ヶ所中、6ヶ所のみ外請負認可された。
- ② 国元から係人数増派の要請。

油島、大樽川の締切工事が加わり、且つ年内完成のため、石の採取に忙しくなるため歩行士以下足軽まで102名の増員、それも着手の9月初めまでに寄越して貰いたい。……実際には104名

が鹿児島から派遣された。

又後日、外請負も12ヶ所の追加が認められ、結局外請負18ヶ所、村請負20ヶ所に落着いた。

【4年5月～11月(7月～12月):工事材料蒐集の苦心】

最も苦心したのが石材で、油島方だけでも2万坪(1坪=6尺立方=6.0m³、故に12万m³)を要し、全体では5～6万坪(30～36万m³)を要するため段取に苦慮した。現地は砂洲だから転石なく、遠く7、8里～10里上流の地方から石を伐出し、船で運び下した。1日300艘位が往復した。途中進捗状況が思わしくないのが、幕吏が躍起となり督促したが、これは平田奉行が、幕吏、地元業者をギリギリの線まで追込んで、結局工費の節減を計る苦肉の策だったと言われる。最終的には山元も承服し、大量の石を工期に間に合わせる事が出来た。

木材も遠国の官木を使わせたため、この輸送にも苦勞した。

【4年6月～9月(7月～11月):休工中の犠牲者36名出る】

工事の支障、出水による手戻り、役人の仮借なき叱責等のため「3の手」所属藩士江夏次左衛門等多くの自刃者が出た。その真因は今以て明かではない。

【4年5月～5年5月(4年7月～5年6月):「赤痢」流行、病死者33名出す】

衛生状態悪く、十分な療養も出来ず、罹病者157名中、永山権四郎の仲間甚八等が死亡した。看護者もなく、異境に果てた人々の悲しみに胸の痛む思いがする。

【4年9月24日(11月8日):第2期工事着手】

【「1の手」…逆川締切、杭出、猿尾、洲波等
【「2の手」…猿尾、切広等

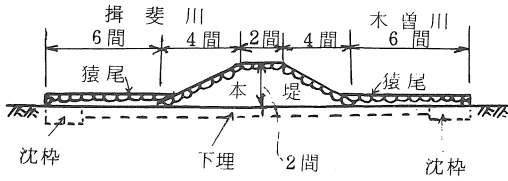


図2 油島締切堤断面図

「3の手」…大樽川洗堰，猿尾，洲浚等

「4の手」…油島締切堤，杵，蛇籠等

工事費の増加：

2大工事追加のため今後12，3万両増，江戸御用金を含めて18万両是が非でも必要，もはや上方の借銀効を奏さず，この上は国元だけが頼みの綱であった。併しこの無理な要求にも藩の上一致，困苦欠乏に耐えて目標額を達成した。真に海内随一の藩としての名誉を挙げた。

〔4年12月18日（5年2月8日）：「2の手」竣功〕

工期3ヶ月にして逸速く完成。竣功量は後記「表5」に記載。

〔4年12月23，24日（5年2月13，14日）：内検分終了〕

幕吏より，「丈夫に出来，大慶」と賞められる。

〔5年（1755）1月16日（2月26日）：江戸派遣の検分使による出来栄検分終了〕

〔5年1月～2月（3月中）：洪水起る〕

又々被害生じ，失費のため手伝方打撃を受ける。

〔4年9月～5年5月（4年11月～5年7月）：第2期工事期間中の犠牲者14名出る〕

前期に較べれば割に減ったが，これは奉行以下の説諭が効いたためだろう。藩士藤井彦八等。

この中1名（竹中伝六）は幕府の直参（御小人目付）にして，上司との諍い^{いさか}か，監督上の責を負わされたのか，悲惨な自決を遂げた（29才）。前記，内藤氏と2人が，部外者である。兎に角武士気質に徹した天晴れな人達である。今次犠牲者の総数は割腹52（平田総奉行以下薩摩方のみ），病死33の85名となった。

3.2 油島締切堤工事

特にこちらは，本邦治水史上，最難工事と称され，これに従事した藩士達は疲労困憊の極に達した。

当地先は三州の境界点に当る枢要な地で，前記のとおり合流点は二川激突，且つ水深は深く工事至難

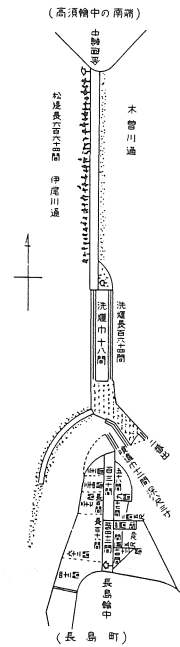


図3 油島締切図（明治以前）

の場所で，享保年中，井沢弥惣兵衛は「合流点の或る部分を閉塞すれば揖斐川は順下する。」との原則に基づき設計した。

着工当初は1,090間(2,000m)全締切か，中明けか未定だったが，取敢えず下埋から着手した。そのための仮締切が大変な仕事で，朽ち船に石を積んで沈めるとか，大木に石を縛って流し要所で切離すとかの策を講じた。

締切堤の構造は図2，図3のとおり，途中11月（12月）幕吏が，工事進展のため中間からも着手する案を建てたが，11月17日付（12月19日）の一色勘定奉行の返書では中間部への水当りを顧慮して，提案は採用されなかった。

〔5年1月9日（2月19日）：工事規模決定〕

締切堤は油島方550間（990m），松の木村方150間（270m）と50間（90m）継足しの200間（360m），中明け300間（540m）とした。

〔5年3月27日（5月8日）：締切堤完成〕

半年間の悪戦苦闘と，終期の好天に恵まれ，予定より早く竣功した。これで「4の手」は全部完了。

〔5年4月初（5月）：内検分終了〕

さすが辛辣な幕吏も，余りの立派さに賞讃の辞を惜しまなかった。

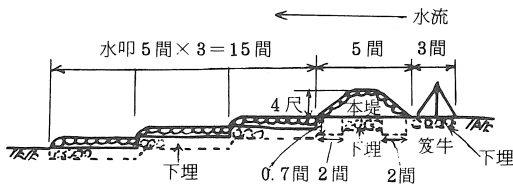


図4 大樽川洗堰断面図

締切堤の構造及材料：

イ) 油島方

(構造)

川分堤：550間(990m)，下埋：550間(990m)
沈 杵：416組，蛇籠：27,300本

(材料)

土：12,000坪(72,000m³)，石：9,700坪
(58,200m³)，木材(杵用)：40,700本，竹(蛇
籠用)450,000本，大工：1,700人
以上の材料費，大工賃計2,400両

ロ) 松の木村方

(構造)

川分堤：200間(360m)，下埋：200間(360m)
元付堤： 根杭： 沈 杵：152組，蛇籠：
11,600本

(材料)

土：4,300坪(25,800m³)，石：4,000坪
(24,000m³)，木材(杵用)：15,800本，竹：
192,000本，大工：600人
以上の材料費，大工賃計980両

総計 約3,400両

以上の額が，幕府負担分で，総額51,600両の1割にも充たないものだった。

完成後藩士達は，新堤上に松の苗木を植え，記念としたが，これが今日うつ蒼たる巨木となって生い茂り，「千本松」史蹟として今に遺されている。

3.3 大樽川洗堰工事

大樽川は長良川から，安八郡大藪町で分流し，西南流して今尾町で揖斐川に合する一派川で，前記のように地形上当川の河床は長良川より8尺(2.4m)低いいため水流が激流となって流れ込み，常に沿岸地に大きな被害を与えた。寛延4年(1751)，村の自普請で喰違堰を設けたがさしたる効果はなかった。今回着工当初は洗堰か完全締切堤か未定のまま11月(12月)に先づ下埋から着手した。そのための仮締切が水深大なるため困難だった。やがて本締切では

維持困難の理由から洗堰に決った。

構造は図4のとおり。

下埋の上に，本堤は，水2合(2丈×0.2=4尺=1.2m)まで堰き止められ，それ以上は緩かに溢流させる。

〔4年12月(5年1月)：下埋完成〕

〔5年2月(4月)：縮小計画成る〕

春の出水に対し下埋が大丈夫だったため，全幅33間を23間にした。即ち水叩5間×5段=25間を5間×3段=15間に縮めたものである。

〔5年3月28日(5月9日)洗堰竣功〕

5ヶ月の辛苦により見事竣成。之で「3の手」全部完了。

大樽川洗堰の構造と材料：

(構造)

洗堰：長98間(180m)，横23間(40m)，(水受，
水叩部を含む)
下埋：長98間(180m)，横18間(30m)
沈杵：66組，蒔石：700坪(4,200m³)，笈牛：35
組，蛇籠：10,900本，粗朶：延長102間(180m)

(材料)

土：30坪(180m³)，石：4,300坪(25,800m³)，
雑木：7,200本，唐竹：197,000本，大工：260人
以上の材料費，大工賃，計730両

幕府負担分は，総額5,000両に対し1割余に過ぎず。之が後年「薩摩堰」と称され跡地が岐阜県史蹟になった。併し当時の洗堰はその後の洪水で流失し現存せず，改造されたものが明治時代まで残った。

〔5年3月27, 28日(5月8, 9日)：「1, 3, 4の手」竣功〕

偉大な土木工事は遂に終った。昨春2月(3月)以来1年3ヶ月に亘る超人的な労力の結集である。〔5年5月22日(7月1日)：幕府派遣の検分使による出来栄検分終る〕

「1の手」「3の手」「4の手」夫々4月21日(5月31日)，5月10日(6月19日)，同22日(7月1日)に無事終了。特に2大工事については，見事な出来栄に，頻りに嘆声揚げられた。

〔5年5月24日(7月3日)：平田総奉行より国元家老宛，最後の報告書発送〕

竣功までの工事経過を淡々と述べ，いささかも自らの功に誇ることなく，無事竣功出来，頂上至極と結んだ点には只頭が下る許りである。然も之が自決前日に書かれた事を思うと，一種悽愴の感すら覚える。

表5 第2期工事竣功量

工 区	普請別	工 種	数量 (総延長)	竣功年月日
1の手	水 行	洗堰締切 (逆川), 洲浚, 新堀, 悪水堀等	6,030間(10,900m)	宝暦5年3月27日
2の手	〃	洲浚, 切広, 杭出, 猿尾等	3,624間 (6,500m)	〃 4. 12. 18
3の手	〃	洗堰(大樽川), 洲浚, 堤上置・腹付, 築流堤, 坎樋等	17,360間(31,200m)	〃 5. 3. 28
4の手	〃	川分堤 (油島), 洲浚, 堀割, 坎樋等	4,233間 (7,600m)	〃 5. 3. 27

〔5年5月25日(7月4日):平田総奉行自刃〕

大牧の役館(本小屋)に於て, 工事の全責任を負い, 藩主にお詫びのため悲壮な最期を遂げる(行年52才)。

辞世「住みなれし里も今更名残りにて

立ちぞわづらふ 美濃の大牧」

彼が心情, 察するに余りある。昭和13年, 平田靱負を祭神として, 「治水神社」が千本松原の地点に建立された。

3.4 巨額な工事費と材料

以下の量は, 手戻り等の失費は含まれていないから全体では膨大なものとなる。

総額は前記のとおり40万両近い値で, この中幕府負担分は9,900両(2%)に過ぎず, 過酷さが判る。併し工事の恩恵を受けた村々は3州330ヶ村に及んだ。

(材料の内訳)

木材: 121,000本, 木材(幕府負担): 5,800本,
石材: 42,000坪 (252,000m³), 砂利土:
203,000坪, (1,218,000m³), 粗朶: 700束,
竹: 1,743,000本, 藤: 11,000房, 空俵:
163,000俵, 縄: 55,000房

〔5年6月1日(7月9日):藩主より竣功届呈出〕

〔5年6月13日(7月21日):薩摩守に対し褒賞授与(時服50)〕

〔5年6月16日(7月24日):薩摩守重年卒去〕

工事の重圧, 部下の死, 藩費の予想外の支出等, 若年の身に心痛激しく, 僅か27才で世を去ったことは, 不幸な大守と言わねばならぬ。平田靱負の死後僅か20余日であった。

〔5年7月26日(9月2日)幕府の係役人に対し褒

賞下賜。(黄金, 時服等)〕

〔5年9月4日(10月9日):手傳方藩士に対し褒賞下賜(白銀, 時服)〕

伊集院副奉行以下13名。この中に平田総奉行が含まれていないのは「病死」と届出ているため。(勿論「切腹」などとは言えない)

3.5 工事後の負債状況

借銀66万両に加え, 今回分22万両, 併せて約90万両を背負い込む事になり, その後種々の物入り嵩み終局には500万両に達した。

〔天保年代(1830年代):負債すべて償還される〕

天保初年, 藩の財政方調所正左衛門が天才的手段を以て500万両を整理し(実は借倒し策), 加うるに50万両の蓄財すら出来た。之が後年維新回天の事業を各藩に率先, 奔走して達成せしめた原動力となった。義士の霊以て瞑すべきである。

4. おわりに

正味11ヶ月余で, 膨大な工事量を完遂すること自体既に無理な事だが, 之を身を捨て奉公を尽くした犠牲心, 忍従の中に任務を遂行した責任感等, “身を殺して仁を為す”の行為は, 社会風教上から観て「赤穂義士」以上であると言っても過言ではない。

以上史実のあらましを述べたが, 物質文明に酔う今日, 反省すべき点があるのではないか。兎角功利主義, 便宜主義に流れ, 人間の実存的, 根本的な価値を見失ない勝ちになるが, 拙文が何等かの刺戟となれば幸である。当初は, 当時の器材, 技術と今日のそれを比較し, 現時なら幾何の経費, 期間を要するものかを検討したかったが, 資料や時間の不足のため諦めざるを得なかった。

付表) 昭和62年中の主要「記念行事」

1月	長良川大橋開通（既に通の油島，立田2大橋とにより，岐阜，三重，愛知の3県直通）
2月	「近代治水100周年記念碑」及「平田靱負とデ・レイケのリレーフ碑」除幕式
8月	「木曾三川近代治水100周年記念」切手発行
〃	「三川100周年記念式典」開く。（名古屋市公会堂にて。表彰，唄，おどり，記念講演等）
10月	中日治水タワー，治水記念館オープン
〃	デ・レイケ銅像除幕式
	その他，講演会，シンポジウム，懸賞論文，写真・絵画展示会等

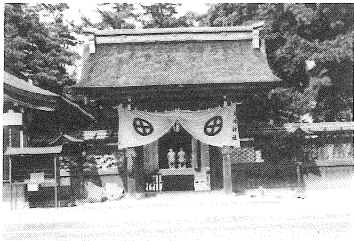


写真1 治水神社本殿



写真2 千本松原

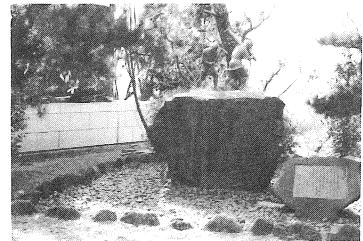


写真3 薩摩義士の像

参考文献

- 1) 伊藤 信：宝暦治水と薩摩藩士，(株)郷土出版社，岐阜，1986
- 2) 大坪草二郎：留魂記<宝暦治水物語>，48，葦真
- 文社，岐阜，1980
- 3) 杉本苑子：孤愁の岸上・下，(株)講談社，東京，1982
- (受理 昭和63年1月25日)